

札幌大学総合論叢 第19号 (2005年3月)

〈研究報告〉

中間言語 (概念) 辞書の構築における意味の3要素

工藤 孝史 山本 裕一
三上 勝生 堀川 哲

まえがき

現代における情報機器の急速な進歩と情報網の拡大は、情報交換に使用される言語の多様化を進行させている。これは、おもにインターネットをはじめとする言語情報伝達手段の国際的普及・拡大によってもたらされた傾向であって、世界の言語環境は今までになかった新しい様相を呈しているといつてよい。そのおもな特徴を具体的に考察すれば、以下のような点を指摘できる。

1) 英語を中心に発達した情報文化圏の拡大は、英語を言語情報交換の業界標準 (デファクトスタンダード) として他の文化圏に普及させる結果になった。英語は現時点で、実質的な「インターネット共通言語」の地位を確立しつつある。

2) それと平行して、世界の主要言語 (日本語を含む) は主に「国内向け」の言語としてパーソナルコンピュータ上で使用できるようになった。現段階で、たとえば Windows XP は英語以外の 24 言語に対応 = ローカライズされている。もっとも世界に 6000 以上あるといわれる公式言語のことを考えれば、これは取るに足らない数字であり、ローカリゼーションはまだほんの端緒についたという段階である。

3) パーソナルコンピュータの OS ローカリゼーションが進むにつれて、英語を主言語としない情報圏においては、国内的には英語と自国語の併存が一般化する結果になったが、

その一方で、対外的には「国内向け」言語が「理解される」「理解されない」にかかわらずネット上に流出するという状態が生み出された。喩えで言えば、「流通しない」貨幣が国境を越えてばらまかれているような状況が生まれている。

4) 現代における言語情報の広域化・国際化には、航路、陸路、空路などの交通基盤は必要なく、パーソナルコンピュータとそれを連結する情報網（インターネットに代表される）があれば十分であり、そのための構造基盤（インフラストラクチャー）は、先進諸国を中心に現在もひきつづき急速に進歩している。しかしその一方で、そうした開発から取り残されている文化圏との格差はますます広がりつつある。OS ローカライズの「恩恵」を被ることのできない言語はインターネットという言語情報交換の国際標準に足を踏み入れることができない状況である。

5) 言語情報網の拡大、情報網の多言語化にともなって業界標準としての英語を軸とするネット上での翻訳サービスが著しく普及しつつある。

6) 英語圏以外の文化圏でも、異言語間での言語情報（交換）網の実質的構築、およびそれに必要な翻訳ソフトウェアとサービスの開発・向上化が見られる。2002年ワールドカップ日韓同時開催を契機に、急速に普及した日本語と韓国（朝鮮）語のコミュニケーションツールやチャットシステムの登場などは、そうした傾向の典型的なものである。また、ヨーロッパ共同体の出現にともなうヨーロッパ内での言語情報交換システムにかかわる研究開発もこの傾向の現れと見ることができる。

このように、言語情報（交換）ネットワークは、インターネット共通言語（業界標準）としての英語を中心に、現在もますます大きな広がりを見せている。

ところで、異言語間の情報交換には、いわゆる「翻訳」行為が必要なのは言うまでもない。とりわけ、パーソナルコンピュータをつかった言語情報交換においては、インターネット、電子メール、チャットなどの情報交換手段に、いかに「翻訳」サービスを連携させて、情報交換の充実と標準化を図るかが大きな課題となっている。我が国では一般向けの日英翻訳システムの開発も進み、たとえば英語で記述されたウェブサイトを一括で翻訳できたり、英語文と日本語文を相互に翻訳できる機能を持ったエディタなどが多数商品化されている。

こうした傾向は、英語が実質的なインターネット標準言語として流通している現況においてはきわめて自然なりゆきであるが、一方で英語以外の文化圏を視野に入れた言語情報交換ということになると、特定のイベントに付随した商品開発（たとえば前述の日韓翻訳ツールなど）を除けば、研究開発は著しく遅れているといわざるを得ない。

たしかに、何億にも及ぶ不特定多数の利用者によって成立している情報交換網：インターネットは、常時生成・衰退を繰り返す巨万の情報によって成り立っている途方もなく大きな混合物であり、その利用者の多くは、英語を含め、自分が理解できる言語でインターネットを利用できればそれでよい、という側面がないわけではない。しかし情報網が、実質的にも、文字通り世界的な広がり（ワールド・ワイド・ウェブ）をもつためには、その中身（情報）が国境を越えて流通しなければならないわけで、もしそうでなければ、「インターネット」は本来の意味での国際的な共有財産にはならないであろう。単に容器が大きくなればそれでよいということではないのである。

その意味では、言語情報網の実質的な多言語化およびそれに適応した翻訳システムの開発は、OSのローカリゼーションと並んで、言語情報交換の構造基盤に関わる大きな課題であって、多言語間の実質的な情報交換がスムーズに実現できるようになるか否かによって、今後の言語情報文化の成り行きは大きく左右されるといわなければならない。

本共同研究は、こうした情勢をふまえつつ「多言語情報交換」の心臓部とでも言うべき機械翻訳システムに関して、「英語を機軸言語としない」多言語同時翻訳の可能性を提案しようとするものである。具体的には、世界の主要な自然言語を、英語を軸とした一対一対応の「翻訳結果」で標準化するのではなく、異言語間で共有できる「意味区分」の体系を確立することによって、特定の自然言語によらない人工的な「語彙・文法体系」のもとに標準化してはどうかという基本テーマを掲げ、われわれは研究・開発を続けてきた。

ところで、我が国における、機械翻訳システムの研究・開発は、人工知能の研究と並んで1980年代から急速に発展して現在に至っているが、このプロセスでいくつかの機械翻訳に関わる方法論が確立されてきた。方法論の点では研究者、技術開発者などの発想と工夫にささえられて、現在もさまざまな翻訳方式が提案され開発されているが、原理的には以下の2つの方式が確認できる。

1) 翻訳行為を、自然言語同士の「語句対応関係」であると理解したうえで、基本的にはソース・ランゲージ（翻訳の原言語）とターゲット・ランゲージ（翻訳の目標言語）の「語句おきかえ」作業をコンピュータに代行させる。

2) 翻訳行為を、自然言語同士の「意味対応関係」であると理解したうえで、ソース・ランゲージの語句（あるいはひとまとまりの表現）を、あらかじめ用意された人工的意味区分、すなわち特定の自然言語に依拠しない概念（中間言語）へ「変換」したうえで、この「変換文」からターゲット・ランゲージを「生成」という作業をコンピュータに代行させる。

前者は「構文トランスファー方式」、後者は「中間言語方式」として知られた方法であるが、多言語間の翻訳処理は、もし特定の自然言語を機軸に行うのでなければ、中間言語方式を採用することになる（図表 [1] を参照）。

構文トランスファー方式の翻訳精度を高めるためには、ソース・ランゲージとターゲット・ランゲージの語句対応を記すと同時に「おきかえ」処理を正確に行うための「辞書」群の充実が必要になる。

これに対して、中間言語方式においては、ソース・ランゲージとターゲット・ランゲージの対応＝翻訳はあくまでも中間言語を媒介した結果として得られるので、ソース・ランゲージとターゲット・ランゲージの語句対応は基本的には2次的問題であって、ソース・ランゲージ、ターゲット・ランゲージを問わず、翻訳対象となる任意の自然言語と中間言語との対応が1次的問題として扱われる。この方式による翻訳精度の向上には、何よりも「中間言語辞書」の充実が不可欠である。

本報告は、おもにこの「中間言語辞書」における意味の記述に関する基本思想を述べるとともに、具体的な製作に関わるいくつかの問題点を述べるものである。

1.0 【中間言語方式について】

複数の異なる言語（多言語）を相互に翻訳する方法として「中間言語方式」が有利だとさ

れる理由は、おもに、複数の言語に共通する意味を記述した辞書＝中間言語辞書ひとつで、同時並行的な多言語翻訳プロセスを管理できる点にある。

しかし、複数の言語に共通する「意味」の記述は、どんな言語で、またどんな方針のもとに設計・記述されるべきであろうか？ またそれは、翻訳行為にどんな制限を与えることになるであろうか？ こうした問題に答えるためには、まず1) 言語とは何か？ 2) 翻訳とは何か？ 3) 意味とは何か？ といった基本問題に答えておく必要がある。これらの基本問題は、コンピュータを用いていかに翻訳行為を自動化するかという技術の前提ないしは根底にある問題であって、情報科学という領域に収まりきらない広い問題領域を予想させるが、とりあえずわれわれとしては、以下のような暫定的見解（仮説）をもって出発する。

*わが国では「中間言語」という用語は、1) Intermediate Language, 2) Interlingua の訳語としてほぼ定着している。前者は例えば次のように定義される：コンパイラ言語を機械語に翻訳する時に、いきなり機械語に翻訳するのではなく、両者の中間的言語に翻訳し、その後に機械語に翻訳するというプロセスを踏むことがある。その中間的言語のこと（「わかりやすいコンピュータ用語辞典」ナツメ社、2004年、9版）。一方後者は、主に英語やロマンス語を基礎に、国際的なコミュニケーション言語として提案される人工言語（an artificial language proposed for use as an auxiliary international language; based on words common to English and the Romance languages. — WordNet ® 2.0, © 2003 Princeton University）を指す場合が多いようである。この報告では、「中間言語（Interlingua）」を、日本語を含む複数の自然言語に共通する意味区分の概念的記述（語彙体系）および、その操作に関わるルールの記述（文法体系）であると定義し使用する。

1.1 【言語，意味，翻訳に関するわれわれの基本的立場（仮説）】

1) 言葉とは「意味」をもった記号（文字，音声などの）体系である。その場合「言葉」は「言語」や「言語体系」と同義である。またヒトはその体系にルールを発見することができる。ルールは「文法」と呼ばれることがある。

2) 意味をもった記号体系とは、ヒトが記号に付与することによって獲得している、世界の区別＝差異化の体系である。但し、その区別＝差異化はたんに受動的＝感覚的なものではなく、創造的＝構成的である。ヒトは、独立記号（例えば／山／，／2／）にたいしても、組み合わせ記号（例えば／山に登る／，／2 + 2 = 4／）にたいしても意味を付与する。

3) 翻訳とは、意味をもった記号を、その意味（原意味）を損なわないように、別の記号に置き換えることである。ただし、狭い意味での「翻訳」は、ある自然言語（表現）を、それとは別の自然言語（表現）に置き換えることである（例えば、／He is a student.／
⇒／彼は学生だ。／）。

1.2 【言語の使い方と意味】

言語は、自然言語であれ人工言語であれ意味のある記号体系である。ヒトは記号の「使い方」を知っている場合にのみその記号を理解できる*。したがって、意味とは、ある言語がどのように「使われるか」という知識の裏付けをもって成立する。もし「使い方」を知らなければ、言語が存在していてもその「意味」はわからない。たとえば「s'il vous plaît」はフランス語の使い方を知らないものにとっては「意味のない」文字列である。また「 $A \vee \neg A$ 」は、論理記号の使い方を知らないものにとっては、やはり「意味のない」記号列である。

*ただし母国語以外の言語の使い方を知らなくても、外国語の単語の「意味」を知っている場合がある。この場合の「意味」は、母国語に置き換えられた「意味」、ないしは母国語の「使い方」に適合させられた「意味」である（例えば Bonjour（仏）⇒ こんにちは、のような「おきかえ」意味）。しかし、フランス語では bonjour は、別れの挨拶にも使われたり、その他日本語の「こんにちは」に対応しない意味（フランス語内での）もいくつか持っているので、この「おきかえ」は、フランス語本来の意味と等価値であるとは言えない。

しかし「使い方」を知っていれば「意味」がわかるかという、決してそうではない。われわれは日本語の使い方を知っているが意味のわからない言葉や文に出会うことはよくある。また外国語学習者は、最初のうちは限られた意味しか知らない状態で学習をはじめ。言語の「使い方」と「意味」は何処が違い、またそれらはお互いにどう関係しているのだろうか。

ある言語の「使い方」と「意味」はどう関係するかといった議論は、言語学や発達心理学でよく問題にされる（参考文献 [3]）。なぜ、そういう議論が起こるかという、おそらくそれは、言語が同じレベルでは語れない「意味」の諸側面をもつからであろう。

意味の諸側面を、今は「対象」と「統語（構文）」という2つの面において検討する。

1.2.1 【対象の特定】

例えば「私は昨日まで東京にいた」という発話は、構文的形式から言っても、意味内容から言っても、ふつうに相手に「意味」を伝えることができるが、もし「私は昨日までヤカンにいた」という発話があったとすると、形式的には正しいように思われるけれど内容がわからないという混乱を引き起こすであろう。

「彼はヤカンに水を入れておいた」という発話が意味を持つのに、上記の「私は昨日までヤカンにいた」が意味を持たないのは、「意味のある」語句の組み立て方をしているのに（つまり語の組み立て方としてはおかしくないのに）、「～は～まで～にいた」という「～」の部分が不適切なために起きる混乱である。

この不適切さは何に起因するものであるかを考えると、以下のような点が考察される。

日本語の「～は～にいた」という形式は、一般的にはある動物（とくに人間）がどんな場所に「いた」かを特定する形式で、その場所を特定する個所に「ヤカン」のように、本来人間がいる場所としてはふさわしくない語句が来ると、意味が通じなくなってしまう。構文的に意味が通じて、人間がヤカンにいるから意味が通じなくなるのである。ちなみに「あの鯉は昨日まであっちの池にいた」なら意味は通じるし、誰かがメダカを買ってきてとりあえず古いヤカンに水を汲んでそこにいれておいたような場合「メダカは昨日まであのヤカンにいた」けど「いまはちゃんとした鉢に移されて楽しそうだ」なども、意味として通じなくはない。

このように、いくら構文的に正しくても意味が通じない発話（「私は昨日までヤカンにいた」）が形式上ありえるという事態は、人間であれコンピュータであれ、「どういう形式で語句をつなげばよいか」という知識を習得したからといって、必ずしも適切な「意味」内容を表現できるとは限らない、という事態を物語るものであり、翻訳という行為においてはきわめて大切なポイントである。

発話の意味は「対象の特定」の適切さに左右される、とすることができる。

1.2.2 【語の組み立て】

一方、たとえば「私から昨日の東京をいた」という発話はどうであろうか。実際にはこのような発話が見られることはまずないが、言語障害の症例としては存在するかも知れない。またシュールレアリストの実験のように、この種の意味不明な発話を「作品」化した例をわれわれは知っている。

上述の例がどうしても通じないのかを考える場合には、語句の内容の相性（人間：ヤカン：いる）という側面とは別に、「語と語をどう結びつけたらよいか」という知識が発話に際してどう役立っているのかという点に注目する必要がでてくる。上述の例で言えば「私～昨日～東京～いた」という「～」にあたる部分にどんな助詞が来ると発話が意味を成し、また成さないか（英語やフランス語では語順や前置詞にあたる）という問題である。

一般的考察ですぐに指摘できるのは、日本語の場合であれば、「～をいた」というように「いた」に関連する言葉を「を」という語句で連結させると意味が通じなくなるという特徴である。日本語の「いた」は一般的に「が」や「に」や「で」に連結する場合には意味を成す（「学生がいた」「公園にいた」「独身でいた」など）が、「を」や「の」に連結すると意味がわからなくなってしまう。これを一般的には「格支配」と呼ぶ場合が多い（参考文献 [1]）。ここでは、格支配に関わる知識を、語順を含め「語と語をどう結びつけたらよいか」という統語論的な知識*であると理解して、これを「統語論」的知識と呼ぶことにする。

発話の意味は「語句の組み立て方」の適切さに左右される、とすることができる。

*そもそも統語論的知識（言語能力の生得的な習得内容と言われる場合が多い）は、発話の「意味」生成にとっては単に形式的な役割しか担っていない。構文的知識は「意味」を通じさせるために必要な知識ではあるが、同時に「意味の通じない」発話をさえ正当化してしまう知識でもある。もし日本語に関する品詞や連結規則を一般的な知識としてもっていれば、「私から昨日の東京をいた」という発話を生成することが可能である（この文をワープロで打ってみればたいいの場合「適切」な漢字かな変換をしてくれるであろう）。しかしこれは発話として意味を成さない。

2.0 【発話の意味の差異】

このように、発話の意味は「対象の特定」と「語の組み立て」の適切さが両立してはじめて通じるようになる。しかし「対象の特定」の仕方および「語の組み立て」方には、それぞれの言語によって実質的な差異があるので、ある自然言語の発話が特定している対象や組み立て（構文）を、そのまま他の自然言語の発話のそれへと移し替えられるかということそうではない（参考文献 [2] [5]）。翻訳においては、この差異をどう埋めるかが問題になる。

既に述べたように、トランスファー方式においては、翻訳対象となる自然言語同士の語句の対応が問題であるので、差異の吸収は「どんな語句にどんな語句が対応するか」また「どんな構文にどんな構文が対応するか」といった観点からこれを行うことになる。

一方中間言語方式においては、ある自然言語の発話は「対象の特定」という点においても「組み立て」という点においても、標準的な概念＝価値体系によって「意味づけ」られて、しかる後にこの意味づけに適合する別の自然言語の発話（例）を生成するというプロセスを介する。したがって翻訳の課題は、翻訳対象となる自然言語同士の「意味のずれ」を吸収することよりも、あたえられた自然言語の「対象の特定」と「組み立て」をどうやって適切な標準概念に置き換えること（意味変換）ができるか、またそこからどうやって適切な自然言語表現を作り出すこと（意味生成）ができるかという点におかれる。

そのためには、中間言語方式に使われる辞書もまた自然言語と同様に、対象を特定できる語彙と、その語をどう組み立てたらよいかという統語規則を備えていなければならないが、同時に、この「語彙」と「統語規則」は、自然言語の体系がそうであるように、その言語に特有な値（意味の体系）ではなく、翻訳対象となる全ての自然言語が共有できる値（意味の体系）でなければならない。

2.1 【いくつかの問題点】

中間言語による「対象の特定」と「語の組み立て」を具体的にはどのように扱ったらよいかという問題を論じる前に、この場合の「対象」とか「組み立て」がもっている問題性に

触れる。

2.1.1 【シーン】

一般に「対象」という言葉は、何か主体的な作用の「目的」や「その作用が向かう方向」を表す言葉であるので、発話における「対象の特定」と言ったときには、発話者が何らかの主体的作用を体現していて、その作用の「目的」や「方向」を意味することになるであろう。

そこで、「一体、発話者は何を体現しているのでしょうか？」と問うてみると、だいたい次のようなことが明らかになる。まず「発話者」であるが、これは言うまでもなく、言語を使って何らかのメッセージを発信している主体である。独り言、という場合も考えられるが、このメッセージには「聞き手」が存在する（独り言の場合は発話者自身が聞き手であるとも考えることもできよう）。言語使用は、基本的に「発話者＝話し手」と「受信者＝聞き手」の間に成立する相互作用である。この言語使用の成立の場所を、「シーン」と呼んでおく。

受信者（聞き手）が発信者（話し手）のメッセージを受け取った時、受信者には何らかの理解、すなわち「発信者との意味の共有」が生まれる。発話者が「対象を特定」する必要があるのは、この「意味の共有」を「シーン」という共有の場において成立させる必要があるからである。

2.1.2 【対象の意味】

例えば、誰かが「私は昨日まで東京にいた」というメッセージを発信するなら、このメッセージが成立する「シーン」を共有している聞き手もまた、「私」「昨日」「東京」「いた」*という特定の対象に関わることになる。聞き手はこれらの語を通じて、話し手と共有している世界の「何」を特定しているのかを理解するのであり、それが一般的に「意味」といわれているものの内容である。これを「対象の意味」と呼ぶことにする。

*この語「いた（いる）」は発話の意味という点では「対象の意味」をになう語である。「対象」という言葉を動詞の目的語（object）という意味で使う場合があるので、紛らわしいところがあるが、これはあくまでも、発話者が「シーン」において特定しようとしている行為のひとつ（つまりこの場合は「読む」や「書く」ではなく「いる」であるという風に特定できる行為）であって、それは話し手と聞き手の間に共有されている対象的な概念である。

2.1.3 【統語的意味】

一方、日本語のような膠着語においては、「は」「まで」「に」といった語は、それ自身が「対象的な何か」を特定しているわけではなく、特定された対象の「組み立て」を特定する語である。また、英語のように「組み立て」をおもに語順（または前置詞）に頼る言語では、「順序」という指標ないしは前置詞によって、組み立て＝構造が特定される。いずれの場合もこれらの指標によって、話し手と聞き手は「特定された対象」がどう関係しているかを理解する。これを「統語的意味」と呼ぶことにする。

2.1.4 【モード】

このように発信者と受信者の間では、双方が共存している世界＝シーンのなかで「何」が特定され、さらにそれが「どう」関係しているかが特定されて、いわゆる意味交換（意志疎通）が成立するが、メッセージには、単にこのような「語」や「語順」といった指標に還元されない、さまざまな指標が含まれている。

たとえば、話し手の「身振り」「声の調子」「顔つき」…といった要素もメッセージを理解するための大きな要素となりうる（参考文献 [6]）。ひどい「しかめっ面」をして発せられた「ようこそいらっしゃいました。もしよかったですらどうぞおあがりください」というメッセージは、「できるならすぐに帰って欲しい」というメッセージなのかもしれない。つまり、発話者の表情が「意味」の決定（とりわけ聞き手の理解）に大きな影響を与えることもありうる。

実際の発話はこのような要素をぜんぶ含めて成立していると考えなければならないが、ここでは、そうした語用論的な問題は別にして、メッセージに含まれる「対象の特定」や「組み立て」とは次元を異にしたもう一つの要素について述べる。

たとえば「私は昨日まで東京にいた」という発話は、また「私は昨日まで東京にいたんだよ」という発話にもなりえる。この場合「んだよ」というのは意味交換の指標としてはどんな価値をもっているのであろうか？

最近の日本語文法書などではこの種の語を「モダリティー」という語で説明してある場合が多いが、歴史的には言語学者、時枝誠記によって細かく研究された「辞」に相当する

「語」である（参考文献 [4]）。日本語にはこの種の言葉が数多くあるだけでなく、実際の発話では多用されるので、これをたとえば英語やフランス語に翻訳するのはなかなか難しい。強いて言えば、英文法などで「modal verbs = 法動詞」といわれている一連の語グループがこれらの「語」と対応しそうであるが、等価であるとはいえない。また、いわゆる「mood = 法」との対応関係も指摘できそうである。

いずれにせよ、話し手と聞き手の間に成立している世界は、たんに「対象の特定（対象的意味）」およびそれらの「組み立て（統語的意味）」によって意味付けられるだけではなく、それらを互いにどんな気持ちで交換しあうかという問題が別に存在しそうである。人間のコミュニケーションは、明らかに発信者と受信者の間に成立する客観的な意味理解のみではなく、シーンに成立している「意味」をどう受け止めるかという心理問題にも大きく影響される。発話者は何らかの心理をメッセージに反映させるということである。この要素を「モード」と呼ぶことにする。

「モード」すなわち発話者と聞き手の間に成立する心理を特定する語が、日本語のように比較的顕在的である言語とそうでない言語の差があるとしても、もしそれが上述の「身振り」や「声の調子」とは違って、何らかの形でテキストに反映される場合があるとしたら（たとえば日本語の「んだよ」）、中間言語においてもこれを区別する指標が必要になってくる。

この問題にたいしては、とりあえずそういう問題があるという指摘にとどめるが、この問題からは、発話の意味を構成する要素として重要だと思われるひとつの考え方が派生するので次にそれを述べる。

2.1.5 【モードの問題から派生する問題】

話し手と聞き手の間に交換される「心理」がどのような指標をもって発話内に特定できるかという問題を考えるならば、「対象の特定」「語の組み立て」として顕現している発話内容、すなわち「身振り」や「声の調子」などを除いたテキストベースのメッセージ（これを「文」と呼ぶことにする）の中に「対象の特定」にも「語の組み立て」にも関わっていない要素がないかを調べてみることに意味がある。

たとえば「私は昨日まで東京にいたんだよ」における「んだよ」などは、既に指摘した通

り、対象の意味（その語が対象を決めている）にも統語的意味（その語が語の組み立てを成立させている）にも帰属させられない要素であるように思われる。

これに対して、たとえば「私は昨日まで東京にいなかった」「私は昨日まで東京にいたかった」「私は昨日まで東京にいるべきだった」「私は昨日まで東京にいたかも知れない（もしそれを知っていたなら）」あるいは「私は昨日まで東京にいたでしょう（もしそれを知っていたなら）」…といった文はどうであろうか。

これらの発話における「なければなかった」「たかった」「かも知れない」「でしょう」などは、まず対象の意味に関わっているとは言えそうもない（「私」、「昨日」、「東京」、「いた」などと同様に扱えない）。一方、これらの言葉が統語的意味に関わっているかという「語と語の関係」を規定するという意味ではそうではない。

日本語で見る限りこの語はむしろ「いる（いた）」という語を補助的に説明する語のように見える。また同じような発話を英語やフランス語で考えれば、これは例えば「had to」「devais」といった助動詞（ないしは法動詞）がなう部分であって、「助動詞」という言葉が示す通り、発話者が、行為：「いる」を特定する際に、そのあり方を補助的に規定しようとする語である。これは対象の意味を関連づけてメッセージを「組み立てる」ために使われる語*と同じだ（「私は東京にいた」における「は」や「に」）とは言えないであろう。

*彼は走る (He runs) / 彼は走るかも知れない (He may run) / 彼は走るべきだ (He must/has to run) / 彼は走れない (He can not run) …など「彼 (he)」と「走る (run)」とを関連づけて「組み立て」ているのは、日本語においては「は」という語であり、英語においては「he」という主格であり語順であって、いわゆる助動詞にあたる語ではない。

このように、もしこの種の語が「対象の意味」にも「統語的意味」にもカテゴライズできないとすると、発話の意味を決める要素としてこれを別の種類の意味として区別しなければならないが、その際に上述の「モード」の問題で見たのと同じような問題が浮上する。

2.1.6 【社会的＝心理的意味】

上記の例で言えば「なければなかった」「たかった」「かも知れない」「でしょう」な

どは、発話者の心理を直接表現するものとは言えないまでも、かれが「対象の特定」や「語の組み立て」とは別に、自分の発話が聞き手を含む社会的な関係の中でどう受け止められるかを、さまざまな社会的要因（たとえば、義務や権利、欲望の実現や願い、あるいはそうした社会関係が実行されるに際して起きてくるさまざまな力関係：すなわち自分と相手の社会的＝状況的地位など…）の点から特定しようとするものであるように思われる。

この特定の仕方は、例えば「丸い顔」とか「寒そうに立っている」といったような様態の特定（修飾的な規定）の仕方ではなく、発話者が自らの発話に対する社会的評価を意識することによって生まれる「意味づけ：特定」であって、その意味では上述「モード」にのべたように、発話者の心的態度の現れと見ることもできる。

この点はもう少し詳しい検討が必要に思われるので継続的な研究課題としておくが、現段階では以上のような考察をふまえて、発話の意味を「対象の特定（対象的意味）」「語の組み立て（統語的意味）」および「モードの特定（心理的意味）」という3つの要因＝契機でとらえるという立場を提案したい。

発話の意味は「発話者の心理」に左右される、とすることができる。

3.0 【結 論】

以上の考察から、上に述べた「対象の特定：対象的意味」「語の組み立て：統語的意味」に加えて「モードの特定：心理的意味」が、それぞれ一体となって、いわゆる発話の意味を形成しているという仮説が成立する。したがって、中間言語（概念）辞書に反映されなければならない発話の要素および意味の要素は以下のようなものになる。（先頭のアルファベット3文字は、中間言語辞書で使用するコード名である）

3.1 【発話の構成要素】

SPK 話し手： speaker >メッセージの発信者。

HRE 聞き手： hearer >メッセージの受信者。

SCN 場面：scene >メッセージが成立する相互主観的条件。>>話し手と聞き手が向き合っている世界（将棋や囲碁でいえば「将棋盤」「碁盤」にあたる。さし手は盤面においてのみ駒や石を進めたり置いたりすることができる。受け手はこの盤面においてのみ駒や石の動きを理解できる）。

MSS メッセージ：message >話し手の言葉，およびこれに付随する意味的要素：すなわち身振り，トーン，状況などの総体。>>本システムではメッセージの中核をとくに「文」ととらえ，これを解析の対象とする。

STC 文：sentence >メッセージの中核的要素。言葉によって表明される話し手の思想。言葉以外の意味的要素による伝達内容と区別される（言葉以外の意味的要素が，本質的には「言葉」に還元されると考えるか，あくまでも「言葉」に還元されない独自の伝達内容をもつかの議論が可能であるが，ここでは言葉による思想の表明＝文を独立したものとして取り上げる）。>>話し手の思想とは「話し手が考えている事柄」のことであるが，話し手の無条件の思想ではない。それは，あらかじめ社会＝習慣的に決定されている「関数的」枠組みのなかで，聞き手が理解する思想である。

CPT 概念：concept >話し手と聞き手が共有している対象的世界の名辞的区分（メッセージを構成する素材）。>>各々の言語体系によって名辞的区分には差異がある。中間言語の名辞的区分は翻訳対象となる言語体系に共有される名辞的区分であり，自然言語の単語の多義（ポリセミ）の中の任意の一義（モノセミ）に対応する。

RUL 規則：rule >話し手と聞き手が共有する統語規則（中間言語においては深層格をもちいる）。>>中間言語の統語的枠組みは「Aである」→対象を指示するだけの文（A），および「AはA'である」→叙述文（A=A'）の2つを基本とする（図表〔3〕を参照）。

MOD モード：mood/mode >メッセージの様態を決定している話し手の社会的＝心理的態度。>>モードは話し手の無条件の心理様態ではなく，聞き手に対する態度としてあらかじめ社会＝習慣的に決定されている「関数的」枠組みである。

3.2 【発話的意味の3要素】

OJM 対象的意味：objective meaning >発話者が「シーン」において特定する概念的世界の意味区分。>>中間言語では上記 CPT (concept) リストによって同定される。

SYM 統語的意味：syntactic meaning >発話者が概念（意味区分）を組み立てる＝関係づけることで特定する叙述形式。>>中間言語では上記 RUL (rule) の枠組みで解釈される。

MDM 心理的意味：modal meaning >発話者が「シーン」において特定する社会的＝心理的態度。>>中間言語では上記 MOD (mode) の枠組みに沿って解釈される（策定中）。

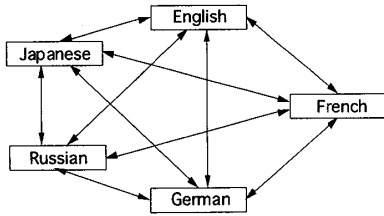
参考文献

- [1] ラルース言語学用語辞典, J・デュボア他著, 1990年, 大修館書店
- [2] 現代日本語文法入門, 小池清治, 1997年, ちくま学芸文庫
- [3] 言葉をもった哺乳類, J・エイチソン著, 1985年, 思索社
- [4] 日本語文法, 岩淵匡編著, 2001年, 白帝社
- [5] ソシユールの思想, 丸山圭三郎著, 1994年, 岩波書店
- [6] Umberto ECO, LE SIGNE, 1988, Edition LABOR

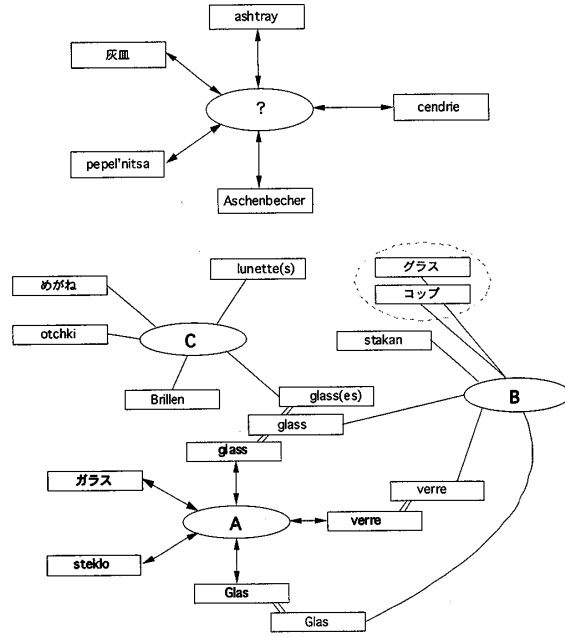
*本報告は平成14年度札幌大学研究助成（共同研究）の研究成果報告である。

図表[1] トランスファー方式と中間言語方式

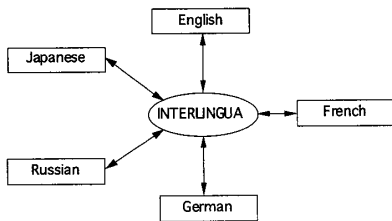
・構文トランスファー方式における語彙の対応



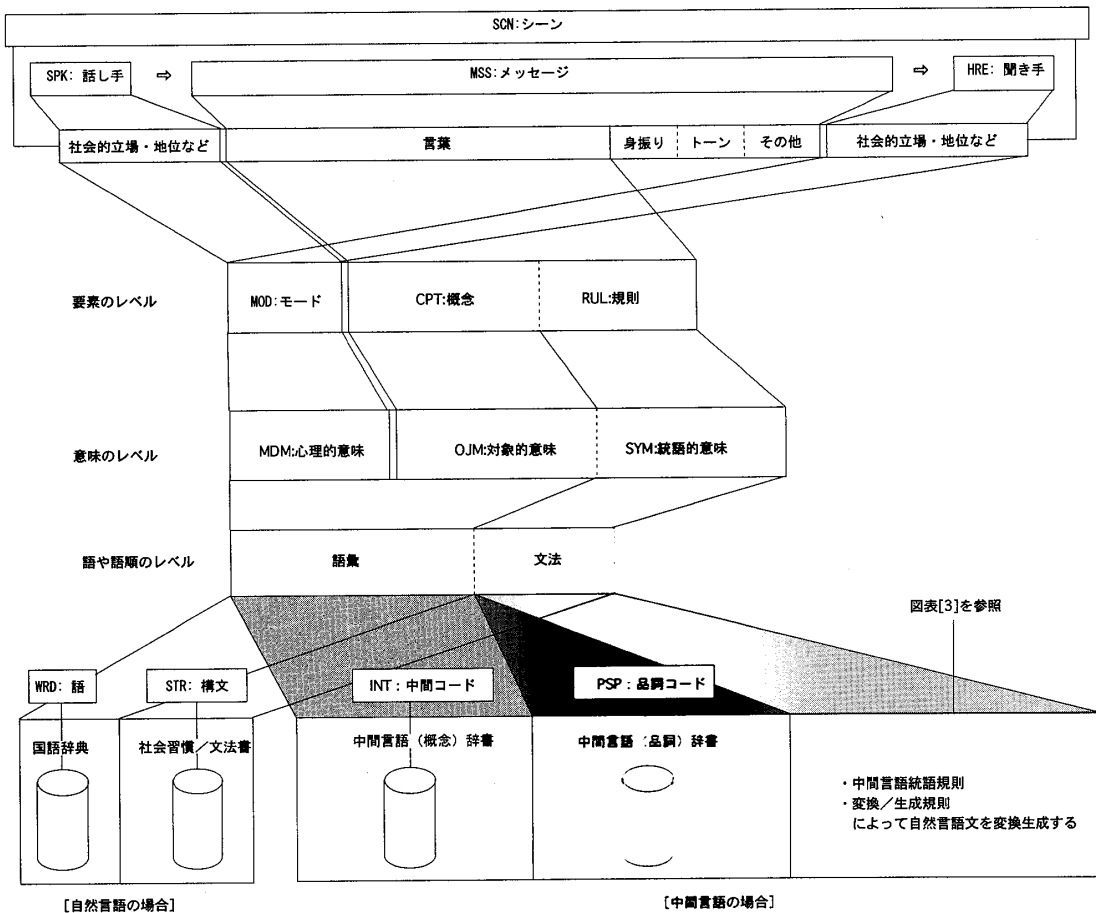
・中間言語 (interlingua) のネットワーク



・中間言語方式における語彙の対応



図表[2] 発話の要素



図表[3] 統語規則適用の具体例

MOD: モード	AGT: 行為者	CPL: 結合子	ATB: 属性	PDC: 述語	PTT: 被行為者
AXV: 助動詞相当語	NTC: 主格相当語	行為者の属性を規定する論理的結合子(ゼロ記号) (=)	NTC: 主格相当語	BVB: be動詞相当語 (繫辞)	GTV: 属格相当語
その他			ADJ: 形容詞相当語		BHV: be/have動詞相当語 (時制・相・態)
			PRP: 現在分詞相当語		ATV: 対格相当語
			PPP: 過去分詞相当語		IST: 具格相当語
			AGA: 属性としての行為者	VRB: 一般動詞相当語	LTV: 位格相当語
					ADC: 状況補語
			CDT/コンディション TNS/時制 ASP/相 VCE/態		
MOD: モード	AGT: 行為者	CPL: 結合子	ATB: 属性	PDC: 述語	PTT: 被行為者
(null)			a student	is	of Sorbonne
です			French	(なし)	to his mother
must	He	(=)	reading	is/was has	a news paper
にちがない	彼は		killed	(なし)	some money
			(he)	gives	by the police
			(彼は)	与える	in a restaurant on Sunday

Aである

Aは

A'である